留萌 いま・むかし

第五十四話

億太郎の海馬島開発2

翌明治三十八年には出田平馬を指揮官として、中村鉄之助、五十嵐松四郎ほか三十数名を乗せ、帆船大日丸が留萌港を出帆したのは四月二十日のことであった。避難船で利尻にきていた長沢真一郎に会うために途中利尻に寄港し、海馬島の状況を聞き、すぐに海馬島にむかった。単身島に残っていた高橋弁蔵は大日丸の船影を見るや飛びだしてきて、崖の上に登り歓喜して迎えたといわれる。

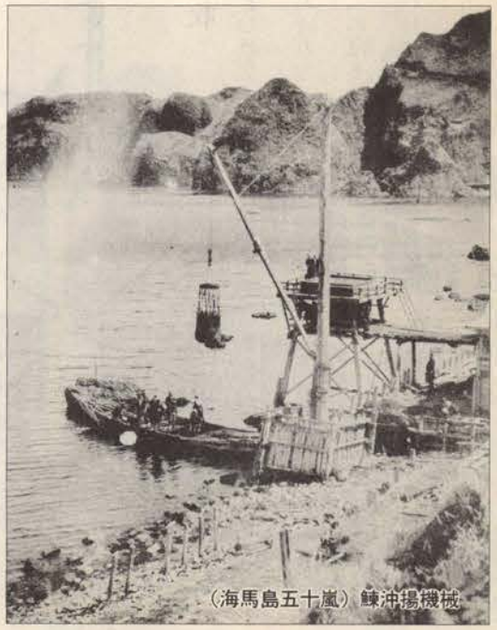
すぐに、汽船豊山丸で建築材料十五棟分、人夫百五十名漁船二十五艘、その他漁網漁具食糧等を輸送し、事業の経営に着手した。

やっと日本軍が樺太に進駐しはじめ、敵状視察による情報を参謀本部宛に送りつづけていた。また、樺太に駐留のロシア兵に対し、降伏をするように策動した。この間にロシア兵が大陸に逃走する途中島に立ちより若干の戦闘があったが、概して平穏のうちに事業は展開していった。

やっと日露戦争も終結し、事業も起動にのりはじめたときに海馬島経営での一大惨事がおこったのである。十月一日中村鉄之助他四名の越年者を残し、本年の操業を終えて帰道したのであるが、その越年者が弊死するという事態に見舞われたのである。越年者五人のうち一月に一人、二月に一人病死の知らせがあった。億太郎以下の心配は日に日につのっていった。しかし、四月に島へ渡ったときには残りの三名も死亡していたのである。病死の二人はビタミンの欠乏による壊血病、他は炭酸ガス中毒であった。

このような事態にもかかわらず億太郎の海馬島経営はつづけられ、公共施設の整備や自分の事業に投資した経費は約七十万円（現在の十五億円以上）にのぼるという。しかし、事業の収支が合っていた訳ではない。大正末期から昭和初期にかけて億太郎は島に十七ケ統の定置網をもっていたが、この着業資金が二十万円といわれている。しかし、年々薄漁になり、資金の回収は思うようにいかなかったらしい。ただ、海馬島にかける情熱は採算を度外視して、彼の亡くなるまでつづけられた。大正十一年にはこの島が海馬村として村制がしかれた。

このように日露戦争により占領開発といった経緯で始まった海馬島の開発は事業的には失敗したものの、海馬島の発展には寄与した。彼のこの貢献に対して大正十四年、時の摂政宮（昭和天皇）が樺太視察の祈、お召艦が海馬島の五十浦湾にお立寄りになり、億太郎を艦上に召されて海馬島の状況をご下問され、お菓子を下賜されるという光栄に浴したのである。億太郎五十二歳の夏であった。



（海馬島五十嵐）鰊沖揚機械

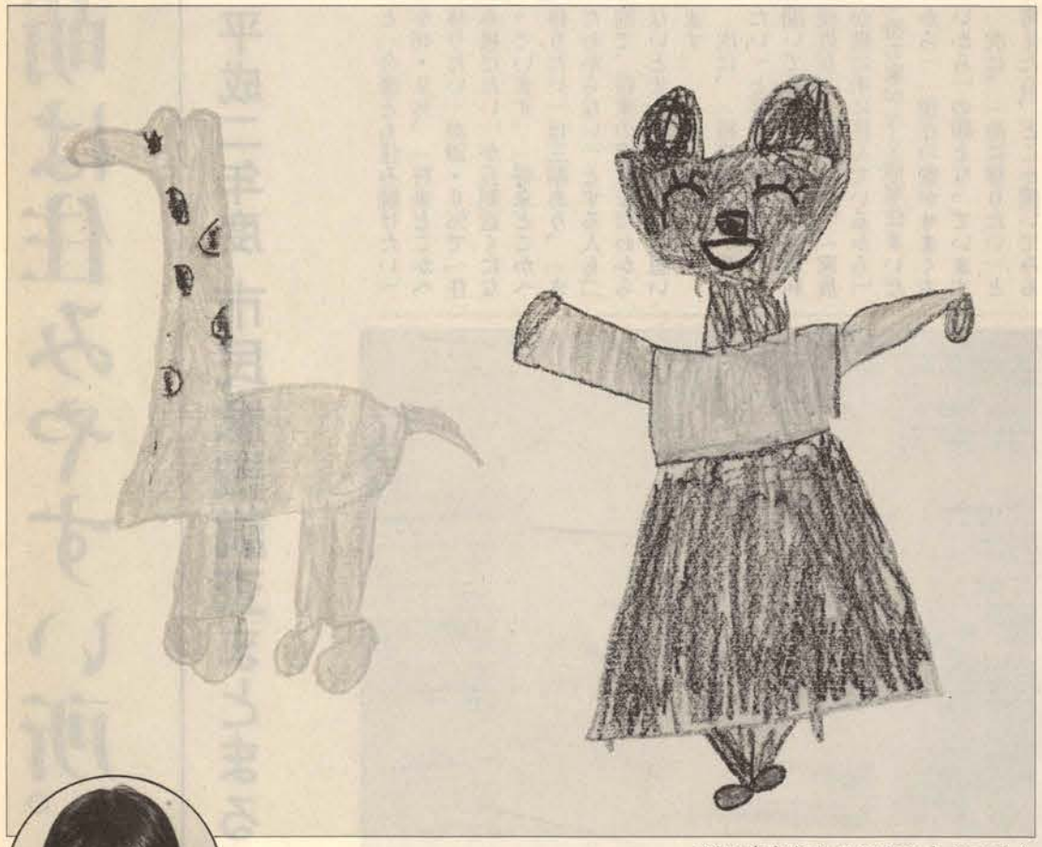
Zing（スィング）6月

表紙の説明

明治32年私立学校創設。明治38年留萌第2簡易教育所として認可。明治41年留萌第2教授場。明治42年留萌第2尋常小学校。大正5年幌糠尋常小学校。大正12年幌糠尋常高等小学校。昭和16年幌糠国民学校。昭和22年留萌市立幌糠小学校と改称。昭和31年木造モルタルぬり2階建ての校舎完成。昭和63年現校舎完成。

ちびっこギャラリー

お子さんの絵を募集しています。☎2-1801 内線293番までご連絡ください。



「キリンさんとクマさん」（港北保育所）
はたけやま めぐみちゃん（5歳・元町）

だいすきなキリンさんとクマさんをかきました。クマさんは、みずいろのふくと、あかいろのスカートをはいています。